父親の育児参加の実態

Current Status of Paternal Involvement in Parenting

柳　原　眞知子
Machiko YANAGIHARA

This study focused on an investigation into current status of paternal involvement in parenting and the subsequent stress experienced by fathers, in order to highlight the best direction for support leading to the promotion of paternal active involvement in child rearing. The four objectives of this study were to 1) understand fathers' awareness concerning their involvement in parenting and the extent of their real involvement, 2) explore whether fathers have parenting stress and if so, the specifics of that stress, 3) identify the factors which prevent paternal involvement in parenting, and 4) identify parenting support needs sought by fathers with infants and toddlers.

The subjects of this study were fathers of infants and toddlers aged zero to three in Yamanashi Prefecture, and a questionnaire survey was used as a method of investigation.

The results of the survey demonstrated that the fathers were actively involved in parenting. While more than half of them listened to their wives' problems and provided emotional support, the fathers had very few people to turn to about their concerns. It appears that they were consulted unilaterally by their wives. As to the obstacles to their involvement in parenting, they cited social factors such as busy work or difficulty in taking holidays. The fathers had low parenting stress. In order to facilitate paternal involvement in parenting, support from the workplace is necessary to secure time for child rearing.

Key words: involvement in parenting（育児参加）
parenting stress（育児ストレス）

天使大学大学院助産研究科

（2007年１月22日受稿、2007年３月28日審査終了受理）

Ⅰ．はじめに

近年、育児は両親の役割という考え方が一般化され、父親の育児参加も少しずつ増えてきていると明石ら[1)]は指摘している。父親への育児参加を求める声は、明石らの指摘のみならず、昨今確実に高まってきている。

父親の育児参加の時間について、「6歳未満の子どものいる世帯夫婦の1日の育児時間」[2)] 調査によると、父親の一日の平均育児時間は37分間であり、母親の10分の1程度であった。育児は母親にとってもストレスの多いことであり、父親の育児時間が少ないからと言って、父親に育児のストレスが無くなるわけではない。「今まで外で働くことが主であった父親は、どのように母子にかかわっていけばよいのかとまどいを感じている」[3)] との指摘もあり、父親たちが、育児に戸惑いを持っていることがわかる。母親に対して、育児サポートが提供されるようになってきたが、父親への育児参加が強調される割には、父親のサポートが十分に提供されているとは言い難い現状である。

父親の育児参加を推進していくには、父親にも母親と同様にサポートが必要と考えられる。そこで、本研究では、父親の育児参加を促すサポートの方向性を模索するために、0歳から3歳の児を持つ父親の育児参加の実態と育児のストレスについて調査を行った。

Ⅱ．研究目的

1．父親の育児参加の実態
2．父親の育児参加を妨げる要因
3．父親の育児ストレス。

Ⅲ．研究方法

1．調査対象

1）対象者：山梨県内の乳幼児（0～3歳）を持つ父親

2）調査場所および配布数：K診療所の乳幼児健診（52人）、K市母子保健センター1歳6ヶ月時健診（72人）、T町立北保育園（75人）、T町立第二保育園（80人）、T町立第三保育園（147人）、T町立保育園（60人）、J保育園（70人）

3）配布・回収方法：直接配布・郵送回収。

配布数556人、回収数236人（回収率：42.4%）、有効回答数134人（56.8%）

2．調査期間

平成14年9月9日～10月10日

3．　倫理的配慮

配布時に調査の目的、アンケートを拒否しても不利益をこうむらないこと、個人が特定されないこと、研究以外にデータを用いないことを説明し、同意の得られた者に配布した。

4．分析方法

データの解析は，統計処理ソフトSPSS v10.0を用いて調査項目すべてについて単純集計を行った。表1については、母親の就労状況による相違を見るためｔ検定を用いた。表15はＫＪ法を参考に分析した。

Ⅳ．結　果

1．対象者の背景

対象者の背景は表1に示した通りである。父親の平均年齢34.03±5.49歳、妻の平均年齢31.93±4.06歳、子ども平均年齢1.75±1.01歳であった。子どもの年齢は、1歳児が最も多く30.6%であった。子どもの数の平均は1.90±0.72人であった。職業は会社員が78.4%で最も多く、次に、自営業、公務員の順であった。家族形態は核家族が79.9%を占めた。

児との接触時間について、平日の平均は2.65±2.75時間、休日平均は10.60±5.67時間であった。

妻の就労状況による違いをみるため、妻有職の父親群（74人・55.2%）と妻無職の父親群（60人・44.8%）の2つの群に分け、妻有職の父親群を「有職群」、妻無職の父親群を「無職群」とした。両者の比較では、「平日の児との接触時間」について、妻が有職者の父親の方が多い傾向にあった。

2．父親の育児参加実態と意識

1）父親の育児参加

父親の育児参加の状況は、表2の1のごとく、全体では、「時々する」が44.0%で最も多く、次に「よくする」29.1%、「めったにしない」22.4%、

表１．対象者の背景

項目	全体(n＝134) Mean±SD	有職群(n＝74) Mean±SD	無職群(n＝60) Mean±SD	有意差
父親の年齢	34.03±5.49 (22～55歳)	33.66±5.01 (22～45歳)	34.48±6.04 (24～55歳)	N.S
母親の年齢	31.93±4.06 (23～44歳)	32.26±4.25 (23～44歳)	31.52±3.80 (24～42歳)	N.S
子どもの年齢	1.75±1.01	1.89±1.01	1.58±1.01	N.S
子どもの性別　男児	52.2%(70)	55.4%(41)	48.3%(29)	N.S
女児	47.8%(64)	44.6%(33)	51.7%(31)	N.S
子どもの数	1.90±0.72	1.97±0.76	1.58±0.66	N.S
職業形態　会社員	78.4%(107)	73.0%(54)	85.0%(51)	N.S
公務員	9.0%(12)	13.5%(10)	3.3%(2)	N.S
自営業	11.2%(15)	10.8%(8)	11.7%(7)	N.S
その他	1.5%(2)	2.7%(2)	0%(0)	N.S
家族形態　核家族	79.9%(107)	81.1%(60)	78.3%(47)	N.S
複合家族	20.1%(27)	18.9%(14)	21.7%(13)	N.S
育児経験　あり	43.3%(58)	48.6%(36)	36.7%(22)	N.S
なし	56.7%(76)	51.4%(38)	63.3%(38)	N.S
平日の児との接触時間	2.65±2.75	3.07±3.44	2.12±1.37	*
休日の児との接触時間	10.60±5.67	10.85±6.14	10.29±5.06	N.S

*p＜0.05　N.S not significant

表２．育児・家事参加の状況

n＝134人

質問項目	選択肢	(%)
１育児参加の状況	よくする	39(29.1)
	時々する	50(44.0)
	めったにしない	30(22.4)
	まったくしない	6(4.5)
２家事参加の状況	よくする	17(12.7)
	時々する	35(26.1)
	めったにしない	60(44.8)
	まったくしない	22(16.4)
３妻の相談に載るか	よくする	50(37.3)
	時々する	34(25.4)
	めったにしない	43(32.1)
	まったくしない	5(3.7)
	その他	2(1.5)

「全くしない」4.5%であった。

育児内容については、恒次欽也ら[4]のを参考に４項目作成した。表３のごとく、「遊び相手」が最も多く、次に「お風呂の世話」であった。

２）父親の家事参加

父親の家事参加は表２の２のごとく、「たまに参加する」が最も多く44.8%、次に「時々する」26.1%、「全くしない」16.4%、「よくする」12.7%であった。

３）妻の相談に応じているか

表２の３のごとく、妻の相談に父親が応じている者について、「よくする」37.3%、「めったにしない」32.1%、「時々する」25.4%、「まったくしない」3.7%、無回答1.5%であった。

「よくする」「時々する」を合わせると、６割以上の者が、相談に応じていた。

４）父親が相談したいと思う内容

表４のごとく、４項目中「子どもの心・行動」48.5%、「子どもの病気」17.9%、「妻が育児に悩んでいること」11.9%、「その他」21.6%であった。

表３．父親の育児参加内容　（複数回答）

n＝487

項目	人(%)
オムツ交換	50(10.3)
トイレの世話	57(11.7)
遊び相手	121(24.8)
お風呂の世話	104(21.4)
ミルク・食事の世話	41(8.4)
保育園への送迎	29(6.0)
子どもを寝かせる	59(12.1)
病気の時の世話	23(4.7)
その他	3(0.6)

表４．育児相談内容

n＝134

回答項目	(%)
子どもの病気	24(18.0)
妻自身の育児の悩み	16(11.9)
子どもの心・行動	65(48.5)
その他	29(21.6)

表５．育児相談をする相手　（複数回答）

n＝147

項目	人(%)
妻	98(66.7)
実の両親	12(8.2)
同僚・友人	24(16.3)
保育園の先生	3(2.0)
その他	10(6.8)

5）育児相談をする相手

父親の相談相手は複数回答で、表５のごとく、「妻」66.7%、「同僚・友人」16.3%、「実の両親」8.2%であった。６割以上の父親の相談相手は妻となっていた。

6）育児相談をしやすい場所

相談しやすい場所は表６のごとく、「病院」が29.7%と最も多く、次いで「育児相談所」14.5%、「健診時」14.5%であった。

9）育児知識を得る方法

育児知識を得る方法は、表７のごとく、41.2%が「妻」から知識を得ており、次に「自分の親」「育児書」「友人」となっていた。「母親学級への参加」は1.5%であった。

10）得た育児知識の量や内容への満足度

表８のごとく、満足度は、「かなり不十分」47.8%「まったく不十分」20.9%と不足と感じている者が約７割であった。「まったく十分」３%「かなり十分」28.3%と十分と感じている者は約３割で、不十分とするものが多かった。

表６．育児相談をしやすい場所　（複数回答）

n＝138

項目	人(%)
保健所	2(1.4)
育児相談所	20(14.5)
健診時	20(14.5)
病院	41(29.7)
その他	55(39.9)

表７．育児知識を得る方法　（複数回答）

n＝194

項目	人(%)
育児書	24(12.4)
妻	80(41.2)
母親学級に参加	3(1.5)
会社の先輩・上司	19(9.8)
友人	19(9.8)
自分の親	29(14.9)
その他	20(10.3)

表８．得られた知識は十分だったか

n＝134

回答項目	人(%)
まったく十分	4(3)
かなり十分	38(28.3)
かなり不十分	64(47.8)
まったく不十分	28(20.9)

11）詳しく知りたい育児知識

表９のごとく「子どもの成長・発達について」が最も多く41.5%、次に「発熱など緊急時の対応方法」が32.7%、「子どもの生活リズムについて」が16.3%、「オムツ交換等の育児技術について」1.4%、「その他」8.2%であった。子どもの成長・発達や病気に関する知識のニーズが高かった。

12）育児をする上での父親のモデル

表10は、父親が育児をする時に、モデルとなる存在がいるかを調査した。47.8%の父親は、モデルとなる存在がいないと回答していた。モデルがいる者では、自分の父親をモデルとする者が20.1%で一番多かった。次に友人で10%であった。

育児モデルがいない者が半数近くとなっていた。

３．父親の育児参加を妨げる要因

表９．詳しく知りたい育児知識　（複数回答）

n＝147

項目	人(%)
子どもの成長・発達	61(41.5)
子どもの生活リズム	24(16.3)
発熱などの緊急時の対応方法	48(32.7)
オムツ交換など育児技術	2(1.4)
その他	12(8.2)

表10．育児をする上でのモデルはだれか

n＝134

項目	人(%)
実父	27(20.1)
義父	1(0.7)
育児書	8(6)
友人	13(10)
職場の上司	7(5)
いない	64(47.8)
その他	14(10.4)

表11．育児参加阻害要因の各項目得点

n＝134

項目	平均値	中央値	標準偏差	n数
①仕事が忙しく育児への時間が持てない	3.73	4.00	1.28	134
②育児休暇を取るのは体裁が悪い	3.60	4.00	1.41	134
③子どもの事では会社を休みにくい	2.99	3.00	1.52	134
④時間があればもっと育児参加したい	1.98	2.00	1.04	134
⑤育児参加することで周囲の批判がある	1.63	1.00	1.02	134
⑥育児は基本的に母親の仕事だと思う	2.66	3.00	1.46	134
⑦育児にあまり関心がない	1.60	1.00	1.01	134
⑧休みの日には自分の時間を持ちたい	3.32	4.00	1.33	134
⑨育児に対する自信がない	2.35	2.50	1.16	134
⑩育児に関する知識がない	2.76	3.00	1.10	134
⑪これらの問題が解決されれば育児に参加したい	1.96	2.00	0.98	134

表12．育児参加阻害要因

n＝134

項目	そう思う	どちらでもない	思わない
仕事が忙しく育児への時間が持てない	65.6%(88)	17.9%(24)	16.4%(22)
育児休暇を取るのは体裁が悪い	55.2%(74)	23.9%(32)	20.9%(28)
子どもの事では会社を休みにくい	45.5%(61)	14.9%(20)	39.5%(53)
時間があればもっと育児参加したい	72.3%(97)	19.4%(26)	8.2%(11)
育児参加することで周囲の批判がある	5.9%(8)	20.1%(27)	73.9%(99)
育児は基本的に母親の仕事だと思う	33.5%(45)	19.4%(26)	47.0%(63)
育児にあまり関心がない	7.4%(10)	9.7%(13)	82.8%(111)
休みの日には自分の時間を持ちたい	56.0%(75)	14.9%(20)	29.1%(39)
育児に対する自信がない	14.1%(19)	36.6%(49)	49.2%(66)
育児に関する知識がない	24.7%(33)	35.8%(48)	39.5%(53)
これらの問題が解決されれば育児に参加したい	72.4%(97)	23.1%(31)	4.5%(6)

丹羽洋子の調査項目[5]を基に育児参加を妨げる要因11項目を作成した。回答は「まったくそう思う」から「まったく思わない」までの５段階評価であり、「まったくそう思う」１点、「少しそう思う」２点、「どちらでもない」３点、「あまり思わない」４点、「まったく思わない」５点とした。逆転項目については修正した。

表11は得点の平均点を示しているが、「仕事が忙しく育児への時間が持てない」3.73±1.28点、「育児休暇を取るのは体裁が悪い」3.60±1.41点、「休みの日には自分の時間を持ちたい」3.32±1.33点で阻害因子の得点が高かった。表12は、回答を３つに分類して見た。育児時間が取れないことに同意する者が半数以上を占めていた。８割以上が育児に関心があるとされていた。男性が育児参加することに周囲から批判はないとするのが７割であった。

表13. 育児ストレス各項目の得点

n=134

項目	平均値	中央値	標準偏差	n数
①子どもの事でくよくよ考える	2.51	2.00	1.35	134
②時間を子どもに取られて視野が狭くなる	1.90	1.00	1.16	134
③毎日同じことの繰り返しで息が詰まるような気がする	1.90	1.00	1.16	134
④育児のため自分は我慢ばかりしていると思う	1.75	1.00	1.02	134
⑤自分一人で子どもを育てているように思う	1.24	1.00	0.64	134
⑥育児につまずくと自分を責める	2.20	2.00	1.15	134
⑦何となくイライラする	2.49	3.00	1.20	134
⑧子どもが生まれてよかった	1.13	1.00	0.50	134
⑨これからの育児が楽しみである	1.49	1.00	0.76	134
⑩子どもと一緒にいると楽しい	1.34	1.00	0.66	134
⑪育児によって自分も成長しているように思う	2.07	2.00	1.18	134
⑫子どもの事がわずらわしい事がある	2.47	2.50	1.19	134
⑬ちょっとしたことで子どもをしかる	3.06	3.00	1.27	134
⑭子どもを叱る時叩いたりつねったりする	2.54	3.00	1.37	134
⑮子どもと気持ちが通い合っていると思う	2.13	2.00	0.94	134
⑯子どもは生きがいである	1.78	1.00	1.11	134
⑰自分から子どもをあやしたり遊んであげたくなる	1.81	2.00	0.97	134
⑱朝、目覚めがさわやかである	3.25	3.00	1.28	134

①～⑦：育児生活へのストレス
⑧～⑪・⑮～⑱：育児肯定感
⑫～⑭：否定的育児行動

4．父親の育児ストレス

加藤道代、津田千鶴ら[6]が母親用に作成した「育児ストレス測定尺度」18項目を父親に置き換え使用した。項目内容は育児に対する否定的な態度や身体状況の項目（10項目）と、肯定的な態度や身体状況の項目（８項目）であった。回答は「まったくそう思う」から「まったく思わない」までの５段階評価であり、「まったくそう思う」１点、「少しそう思う」２点、「どちらでもない」３点、「あまり思わない」４点、「まったく思わない」５点とした。逆転項目については得点を修正した。得点が高いほど高ストレス、低いほど低ストレスを示す。表13は項目の得点を平均値で示した。3.0以上を高ストレス、2.0以下を低ストレスとした。

平均得点の高い項目は、「ちょっとしたことで子どもをしかる」であった。「自分一人で子どもを育てているように思う」が、ストレス項目の中で得点が低くかった。

表14は、「そう思う」、「思わない」、「どちらでもない」の３つに分類した。育児肯定項目について「朝目覚めがさわやか」の項目以外、多くの者が肯定感を示していた。

5．父親が育児をしていく上で必要と思うサポート

父親が育児をしていく上で必要と考える育児支援について自由記述されたものを、表15のごとく、２名の研究者によりＫＪ法を参考に分類した。内容から「受けたい育児支援」と「父親自身が母子にしていくべき支援」の２つに分類した。前者を「休暇支援」「経済的支援」「育児環境整備」「教育的支援」「社会的支援」「育児支援は必要ない」の６つのカテゴリーに分類した。この中で「育児休暇」の項目が最も多く、次に「経済的支援」、「教育的支援」、「社会的支援」の順であった。後者の中カテゴリーは３つに分類され「育児支援」が最も多く、次に「時間の共有」「妻への支援」の順であった。

Ⅴ．考　察

1．対象者の背景について

家族形態について、「社会生活統計指標」[7]によると核家族は全国で58.4％に対して、山梨県での本調査では79.9％であった。母親の就労状況は有職者が55.2％で、半数以上が共働き世帯であった。これは、対象者の約８割が保育園に通園して

表14. 育児ストレス項目(全体)

n=134

項目	そう思う	どちらでもない	思わない
①子どもの事でくよくよ考える	24.6%(33)	23.9%(32)	51.5%(89)
②時間を子どもに取られて視野が狭くなる	12.6%(17)	17.9%(24)	69.4%(93)
③毎日同じことの繰り返しで息が詰まるような気がする	11.9%(16)	19.4%(26)	68.6%(92)
④育児のため自分は我慢ばかりしていると思う	8.2%(11)	13.4%(18)	78.4%(105)
⑤自分一人で子どもを育てているように思う	0.7%(1)	9.0%(12)	90.3%(121)
⑥育児につまずくと自分を責める	12.6%(17)	32.8%(44)	54.5%(73)
⑦何となくイライラする	18.7%(25)	33.6%(45)	47.8%(64)
⑧子どもが生まれてよかった	97.0%(130)	2.2%(3)	0.7%(1)
⑨これからの育児が楽しみである	90.3%(121)	7.5%(10)	2.2%(3)
⑩子どもと一緒にいると楽しい	93.3%(125)	6.0%(8)	0.7%(1)
⑪育児によって自分も成長しているように思う	70.9%(95)	17.2%(23)	11.9%(16)
⑫子どもの事がわずらわしい事がある	26.1%(35)	23.9%(32)	50.0%(67)
⑬ちょっとしたことで子どもをしかる	44.7%(60)	23.1%(31)	32.1%(43)
⑭子どもを叱る時叩いたりつねったりする	29.1%(39)	22.4%(30)	48.5%(65)
⑮子どもと気持ちが通い合っていると思う	68.6%(92)	23.9%(32)	7.5%(10)
⑯子どもは生きがいである	77.6%(104)	14.9%(20)	7.4%(10)
⑰自分から子どもをあやしたり遊んであげたくなる	79.8%(107)	14.2%(19)	5.9%(8)
⑱朝、目覚めがさわやかである	27.6%(37)	30.6%(41)	41.8%(56)

①～⑦：育児生活へのストレス
⑧～⑪・⑮～⑱：育児肯定感
⑫～⑭：否定的育児行動

いる子どもの親が占めていることが、影響していたかもしれない。父子の接触時間については、平日が2.65±2.75時間、休日10.60±5.67時間であった。これに対して、「日本の白書」[8] のよると父親の平均育児時間は平日では1日平均10分間、土曜日では30分間、日曜日でも38分間とされていた。平日の育児時間について妻有職の父親の方が接触時間が多かったが、妻が職業を持っていると必然的に育児に参加せざるを得ない状況であることが推察される。

2.　父親の育児・家事参加

1）育児参加状況

育児参加状況について、約7割の父親が育児に参加していた。これは「仕事をするよりも家庭で家族とともに過ごす時間をより大事にしたいとする者が、80年代から増え、90年代になって定着している」[9] と指摘されていることからも、育児参加をするのがあたりまえとする意識へとシフトしてきているのかもしれない。

2）家事参加状況

父親が家事を手伝うことは、母親の家事労働時間を減少させ育児に時間的な余裕ができ、このことが間接的な育児支援になると考え、家事参加についても調査を行った。

家事参加状況は、「よくする」「時々する」を合わせても38.8%であった。育児参加に比べ参加率が少ないが、服部の調査でも「『炊事』『掃除』『洗濯』などは『ごくたまに』『全くしていない』が80%前後」[10] という結果であり、本調査も、父親の家事参加は十分ではなかった。

3）妻への精神的支援

父親の育児における役割として、児への直接的な関わりだけでなく母親への援助も大切な育児協力となる。大日向は、妻が夫に求めていることとして、「ときには子育ての愚痴を聞いて欲しい、たまには『一日中子どもの世話でたいへんだったね』といたわって欲しい、今日あったことを互いに話し合う時間が欲しい」[11] とのニーズがあると指摘している。さらに彼女は「家庭で家事や育児に従事する生活は変化がゆるやかで、評価が得にくい領域である。加えて、十分に意思を通わすことのできない乳幼児と一日中向き合う生活は、大人としての時間はもとより、一人の人間としての基本的なゆとりすら持ち得ない」[12] 状況に母親は置かれていると述べている。妻が、夫と話し合いの時間を持ったり、夫を媒介として社会との

表15. 必要と感じる父親への育児支援について(自由記載)

n=135

大カテゴリー		中カテゴリー		回答項目	%(人数)
受けたい育児支援		休暇支援		時間があること	8.15(11)
				会社・上司の理解	8.15(11)
				(子ども・妻の具合が悪い時に臨時で休める職場の理解・システム)	
				育児休暇を取りやすく	3.70(5)
				学校行事でも休めるような制度	1.48(2)
				育児または介護休暇など制度に関する法的整備	1.48(2)
			24.4%	その他	1.48(2)
		経済的支援		経済的支援	8.89(12)
			11.1%	その他	2.22(3)
		育児環境整備		男子トイレにオムツ交換用ベッド・女児トイレなど環境改善	2.96(4)
			3.7%	その他	0.74(1)
		教育的支援		父親も一緒に参加できるイベントや育児教室	2.96(4)
				父親専門の育児教本を支給して欲しい	0.74(1)
				育児知識	1.48(2)
			5.9%	情報	0.74(1)
		社会的支援		行政などによる父親の育児に関する指導	0.74(1)
				保育園の先生や保健婦などかかわる機会を多くする	0.74(1)
				周囲の子どものいる家族と交流がしたい	0.74(1)
				父親同士の交流の場をつくる(育児書・講習会等を通して)	1.48(2)
	51.1%		4.5%	転勤族の精神的フォロー(単身赴任中の妻の支援も含め)	0.74(1)
	(69)	育児支援は必要なし	1.5%	育児支援で育児が出来るわけではない。父親自身の問題	1.48(2)
自らが家庭にする支援		育児支援		愛情	4.44(6)
				積極的行動	2.22(3)
				しつけ	2.22(3)
				一緒に遊ぶこと	3.70(5)
				子どもの気持ちを理解する	2.22(3)
				子どもを束縛しない	1.48(2)
			25.9%	その他	9.63(13)
		時間の共有	7.4%	一緒にいる時間を多くする	7.41(10)
		妻への支援		食事時間など団欒をする	2.22(3)
	48.9%			妻の相談にのる・精神的支援	4.44(6)
	(66)		15.6%	母親への手伝い(家事など)・協力・支援	8.89(12)

接点を得たりと、夫との会話により育児負担感が軽減されるならば、育児を前向きに取り組むことができるようになれるだろう。会話という妻への精神的支援は育児において、非常に重要なことである。今回調査では、妻の相談にのるかどうかについて、「よくのる」「時々のる」と答えたものは62.7%を占め、半数以上の父親が妻への精神的支援を行っていた。恒次ら[13]によると、「父親固有の役割として妻は、相談相手・精神的支持を第1位に選択し、妻の側は単に父親の役割ということよりも夫としての役割を期待」されていると指摘している。今回調査では、約6割の父親が、その役割を果たしていることがわかる。しかし、「たまに」「全く相談にのらない」という父親もおり、父親に母親の相談に応じ、コミュニケーションを図ることの重要性を伝えていく必要がある。

4) 父親の育児相談

父親の相談相手としては、「妻」が66.7%となっていた。父親にとって妻は育児の相談相手として重要な存在となっている。しかし、妻が育児に悩んでいる場合、妻が相談相手であると、閉塞的状況に夫婦ともに陥る可能性がある。夫婦以外では同僚・友人が相談相手となっており、次に実の両親であった。

今後、父親の育児参加が増加するにつれて様々な悩みや葛藤に直面する可能性がある。父親の悩みに適切に対応できるために、どのような専門機関が相談窓口になるのが適切なのか、検討される必要がある。

今回の調査では、相談しやすい場所として、病

院という意見が多く、児の健診時の場所、育児相談所等の意見もあった。出産後病院で父親への育児支援を、十分に行われているとは言難い現状である。父親が児を通して接触しやすい施設に育児相談の場が設定されるなら、父親は抵抗をあまり持たずにサポートを得られるようになるかもしれない。

相談内容については子どもに関することが多かったが、妻に関する悩みも少数であったが見られた。妻の育児に対する悩みについて、父親が対応できないとき、父親をサポートするシステムや情報の提供が必要である。

父親が乳幼児健診などに付き添い、その場で母親といっしょに相談できるよう土・日曜日に開催するなどの工夫も必要である。

5）父親の育児知識

父親が育児知識を得る方法として約半数が妻を頼っていた。父親の育児知識の取得には、妻が十分に知識を持っているならば、妻を通して伝達が可能になるかもしれない。また、約7割の父親は、育児知識が十分でないと思っていた。

知りたい育児知識としては、「子どもの成長・発達」「緊急時の対応方法」などが多かった。育児技術については、対象者の子どもの年齢が1.75歳ということもあり、すでに育児技術については、ほぼ習得されている時期であったため、ニーズが少なかったかもしれない。

いかなる知識のニーズがあるかについて、今後も調査し、ニーズに即した知識の提供が必要である。

6）育児モデル

父親は、誰に育児モデルを求めているかを探ったが、半数近くの者が、モデルはないと回答されていた。モデルがあるとする者は、自分の父親とする者が多かった。育児モデルの無い父親は、自己の父親としてのアイデンティティをどのように形成していっているのだろうか。父親にとって育児モデルは必要なのか否か、また必要ならば、どのようなモデルが最適なのか今後検討されていかなければならない。

3．育児参加を妨げる要因

父親の育児参加を妨げている要因としては、半数以上のものが「仕事が忙しく育児への時間が持てない」「育児休暇をとるのは体裁が悪い」など育児時間の確保の困難性や抵抗感を挙げる者が多かった。

育児のために男性が時間を取ることに対して、社会もまた男性自身も抵抗を感じざるを得ない現況がある。父親の育児参加を推進するには、男性自身が育児時間を取ることを当然のことと思えるような意識の変容と職場や社会が育児のために時間が取れるような保証が必要である。時間があれば育児にもっと参加したいと思っている父親が7割いることからも、時間の保証は重要である。

「育児は基本的に母親の仕事だと思う」は33.5％であった。男性が育児を当然の役割として受け入れていくためには、育児を男女の役割として考えられるような働きかけも必要である。

4．父親の育児ストレスの状況と関連要因

今回使用した育児ストレス尺度は、育児スキルのなさからくる不安や、漠然としたイライラ感、自分自身の生活が思うようにならないストレスなど、日常の育児生活のストレスを示す「育児生活へのストレス」、子どもへの肯定的感情や態度を示す「育児肯定感」、子どもに対し否定的行動を示す「否定的育児行動」の3側面から構成されている。

「ちょっとしたことで子どもをしかる」、「朝、目覚めがさわやかである」の2つの項目が高ストレスを示していたが、全体的に「育児生活へのストレス」が低い結果となったのは、母親に比べ、父親は一日中子どもの世話に追われることが少ないからかもしれない。

5．父親が育児をしていく上で必要と思うサポート

回答内容をＫＪ法を参考に分類したが、大カテゴリーとして「受けたい育児支援」と「父親自身が母子にしていくべき支援」とに分類された。

「受けたい育児支援」については、「休暇支援」、「経済的支援」、「教育的支援」、「社会的支援」5つに分類された。「休暇支援」が多かったのは、育児参加を妨げている要因が休暇や時間的なことについての割合が多かったことを考え合わせると、休暇支援の要望が多いのは必然的であったかもしれない。育児休暇は特に共働き世帯にとって必要なことで育児休業法でも父親が育児休暇を取ることが可能になっている。しかし、厚労省の平成14年度の女性雇用管理基本調査[14]による平成12年

の女性の育児休暇取得率が56.4％に対し、男性では0.42％であった。男性の育児休暇取得が極端に低い現状を考えるなら、男性が育児休暇を取りやすい環境が今後検討されなければならない。

次に「経済的支援」となっていたが、出産や養育などに掛かる費用が家計に占める割合が高くなっている昨今、経済的優遇措置も検討される必要がある。

「教育的支援」には「父親も参加しやすい育児教室」、「育児知識や情報の提供」の意見があった。また、「社会的支援」には「家族・父親同士の交流の場」などがあった。

このようなニーズがあったにもかかわらず、両親学級への参加が少なかった。既存の枠を超えた新たなコンセプトの育児支援の場の構築が必要なのかもしれない。

「自らが家庭にする支援」としては「育児支援」、「妻への支援」、「時間の共有」あった。少ないとは言え「妻への支援」を男性が挙げてきたことは、重要である。夫の妻への支援が重要であることを、伝えていく必要がある。

先の「受けたい育児支援」と考え合わせ、具体的で父親のニーズに即した育児支援のサポート体制作りが、検討されていかなければならない。

Ⅵ. 結論

1．育児参加約７割、家事参加約４割と、育児への参加が多く見られた。
2．約６割の父親が妻の相談に応じていた。
3．父親の育児相談の相手は妻とするひとが約６割であった。
4．父親の育児参加を妨げる要因としては、仕事が忙しい、休暇がとりにくいといった時間的、社会的なことが要因となっていた。
5．父親の育児ストレス得点の平均は、「否定的育児行動」に関する得点が高く、「育児肯定感」に関して、育児に肯定的であった。
6．必要な育児サポートの希望としては、育児時間の保証が多かった。

Ⅶ. おわりに

今回調査により、父親の育児参加の現状について、概観を把握でき、父親の育児参加を促すにはサポートが必要であることが明確となった。しかし、今回の調査対象が、一地域に限定されていたこと、保育園での対象数が多いこと、質問の回答項目が限定されていたことなど、今後の課題が多く残された。価値観が多様化する時代にあって、ニーズに応えていくためには、日々父親ニーズを把握していかなければならない。これからも調査項目を精錬し、広い地域での調査を基に、具体的なサポートを検討していくことが必要である。

引用文献

1) 明石洋子，菅原由美：育児に対する父親の認識と参加，小児看護，18 (10)，1388-1390，1995.
2) 平成10度厚生白書　少子化を考える，83，1999.
3) 二宮恒夫他：妻たちから夫たちへの要望，助産婦雑誌，49 (7)，543-549，1995.
4) 恒次欽也：育児における父親の役割に関する調査研究，平成５年度厚生省心身障害研究.
5) 丹波洋子：今どき子育て事情，238-249，ミネルヴァ書房，1999.
6) 加藤道代，津田千鶴：宮城県大和町における０歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討，小児保健研究，　57 (3)，433-440，1998.
7) 総務省統計局：社会生活統計指標，21，2002.
8) 日本情報教育研究会，日本の白書，550，1998
9) 有路 亨：家族は変わったか，47，有斐閣、1995.
10) 服部律子：０～２歳児の父親の家事育児行動と母親の健康と関連，母性衛生，43 (1)，43-50，2002.
11) 大日向雅美：子育てと出会うとき，57，日本放送出版協会，1999.
12) 同上書，67
13) 前掲書，総務省統計局，21.
14) 厚生労働省「平成14年度　女性雇用管理基本調査」
http://www.mhlw.go.jp/houdou/2001/07/h0723-2.html